

## 日本の山間河川における最終氷期以降の河床縦断面形変化の地域特性 Regional characteristics of river long profile development in mountain areas, Japan since the Last Glacial Period

坂本 優紀<sup>1\*</sup>, 須貝 俊彦<sup>1</sup>

SAKAMOTO, Yuki<sup>1\*</sup>, SUGAI, Toshihiko<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 東京大学大学院新領域創成科学研究科

<sup>1</sup>The University of Tokyo, FSKC

河床縦断面形は、河川を土砂運搬システムとして捉える上で重要な地形要素の一つである。気候変動に対する河川の応答を検討するためには、堆積・侵食過程を明らかにするだけでなく、土砂運搬システムとして河川を把握する必要があり、河床縦断面形の定量的な検討が不可欠である。

最終氷期後半における河川の発達に関しては、東日本では一時期堆積傾向にあり、その後下刻作用が卓越したことがわかっている。これは最終氷期後半の気候変化に対する河川の応答の結果と考えられる。一方、中部地方以西の河川に関しては河成段丘の発達をまとめたものは少ないが、東日本の河川の発達史とは異なる傾向にある。日本国内においてこれらの河川発達の違いを引き起こした要因を探ることは、将来の河川変化を考える上で重要なことである。また、個々の河川での最終氷期から現在に到るまでの変化を明らかにした研究は多く見られるが、日本全国の河川を対象として定量的に検討した研究は少ない。

本研究では、最終氷期以降における日本列島の山間河川の地形変化を、河床縦断面形の曲率変動と適合関数型の変化として定量化し、地域的な特性を考察した。具体的には、最終氷期以降に形成された連続性のよい河成段丘面の堆積頂面と現氾濫原面を対象として、投影河床縦断面形を復元して、解析を行った。なお対象河川は、最終氷期中に火山活動や大規模な地殻変動の影響を受けていないものを選定した。その結果、河川は指数関数型とべき関数または一次関数型に分類できた。東、西日本の河川の曲率変動と適合関数型に関する検討結果を発表する。

キーワード: 河床縦断面形, 河成段丘, 気候変動, 河川システム

Keywords: river longitudinal profile, fluvial terrace, climate change, fluvial system